

言語學管見：論説

著者	桑野，禮治
雑誌名	龍南會雜誌
巻	9 9
ページ	1 0 - 2 2
発行年	1903-05-25
その他の言語のタイトル	言語学管見：論説
URL	http://hdl.handle.net/2298/5531

言語學管見

講師 桑 野 禮 治

十

○茲に、小生が諸君に紹介致さんとする事項は、言語學管見と題して頗漠然に思われますが、實は
 輓近印歐音韻學に於ての一發見エルネル氏定理を開陳する心得であります處、此に就て有名なる
 グリナム氏定理の梗概を前提しなければならず、從つて一般に斯學の大勢をも説明しなければなら
 んので、件の如く命名した次第であります。然しながら小生の立脚は、専門者としての講釋でなく
 好事家としての演説でありますから、敘述の順序や論証の適否を乞はね、如何にももの足らん處が
 多いでしようが、其邊は今より十分に御推察を願いたい。

○名を牒を表すとか申して必要なことと存じますから、まず本題の稱呼より始めましょ。今更个様
 なことを珍しげに説き立てるの、雅典の鼻を伴ふ所爲と、皆様より冷嘲を被るかも知れません
 が、全く小生の甘受する所で、是が一片の老婆心です。扨一口に言語學と申すなら、「英」語を學ば
 れた方、philology 又「獨」語に通ぜらるゝ人、philologie のことならんと早合點せらるゝかも知
 れませんが、そこに少くあることで、前陳の原語が今日已に文獻學と申しまして最早全く範
 圍を異にした學問です。尤斯學と從來殊に親密の關係がありました。ですから此に就て由來沿革
 等を考へるのも亦一興であります、小生の門外漢のことでムいいますから、今御免を蒙り直に本
 題に立返りましょ。其で言語學のことを、「佛」語で linguistique と申し「獨」語で sprachwissenschaft
 schaft と稱し、「英」語で science of language と長たらしう呼んで居ます。然し此等の名稱も、只今
 ではかく極まりましたものと、一時わななく喧しく前世紀の前半には甲論乙駁して底止する所を

知らずともゆへに安排でした。譬へば、「獨」國のシライヘルの如く、今でも現に一派の學者が *sociologie* (社會學) とゆへに術語を嫌うが如き理由にて、*linguistik* を排斥して *logistik* を主張し、伊國の *assologie* の如き、*glossologia* と命名した位なのです。で、一寸「獨」語の *sprachwissenschaft* に就き、二の類語と對比して區別を辨する必要があります。第一 *sprache* 一名 *grammatik*、すなわち世間でゆへに文法學のことで、一種の國語につき之を正當に表出する規則を教うる學問と區別し、第二 *sprachenkunde* 一名 *philologie*、すなわち博言法と申して、實用的に幾多の外語に習熟せる方法とも分離するのです。其ですから、言語學とわ、言語を言語としてこの本鉢と發達を研究する學問と申して差支なく、言語自身を對象として觀察するのでから、文獻學や人類學等に於て、之を自己の目的を達する補助的方便とすることゝ大に相違致します。從うて斯學が文法學や博言法に對する位置わ、本鉢と現象、又わ根底と枝葉、或わ源泉と下流とゆへに様な具合で緊急なことを申す迄もなく、殊に國語の統一や文字の改革に亘る大問題の解決にわ是非とも此に就きましての深い知識が必要です。今述べた次第でありますから、之を、從事する人物に移して考へてみても、語學者と博言家とわ全く別種の譯で、兩方の差違を明白にする爲に一例を擧げて極端に申しますと、語學者わ自國の言語のみ外に精通する國語がなくとも、言語自身に關する性質發達等すべて確實なる知識があれば足りて居ますし、二仟數十個の國語を自在に談話する技能、譬へば十幾個の國語に通じた古代のミトリダテスや、六十個の國語を談じた近世のメツォフンチの様な人人でも語學上の専門家とわ申されません。○其から、言語學の内容に就て一寸蛇足を添へますと、元來此は嚴密なる飯納法に基かなければならぬものですから、牛津大學のミョルレルをわ、斯學を精神學 (*geisteswissenschaft*) に屬して

ものでなく、却て萬有學(naturwissenschaft)に皈すべきものと申しました。然しながらこの意見は、多數の學者の承認を受けませんで、矢張只今でわ心的科學に編せられて居ります。さて斯學の對象たる言語自身は、材料よりゆゑと、肺臟に必需なる空氣の呼出を利用して表出する音韻ですから、此は物理學で取扱う音響の規則に従うもので、之を研究する部分を音韻學すなはち「英」語でわ常に phonetics 又「獨」語にてわ稀に phonologie と稱は、尙之を細別して生理的音韻學と歴史的音韻學との二者に分ちます。但し音韻だけでわ全く自然的現象で無意味のもですが。此に吾人が一定の概念を附加してから。始めてゆわゆる精神容姿となり靈妙の内容を帯びるのです。従うて心理學の知識や論理學の規則を補助に借りなければならのです。音韻學に對して、この部分を「獨」語でわ semasiologie「佛」語でわ sémantique すなはち意義學と申すのです。處で音韻學に就ては、前世紀の中葉より以來ヘルムホルツやミユルレル等が生理學の方面より研究し始めまして、スキートやジエルス等之を補足して大成し、現在巴里のバーシー馬^{バシー}集のフイートルと、斯學を以て雷名を歌米に轟して居ます、之に反し、意義學に就ては、その研究が甚進んで居らず。況して之を系統的に著述したもの、佛國のミシエル、ブレアルの近作 *essai de sémantique* 一冊しかないゆゑ有様です。

○實用的博言法は、十八世紀の晩年より、英人ハミルトン^{ハミルトン}佛人ジャコト^{ジャコト}等の考案が出来ましてから、十九世紀に至り、ブレツ・オットー等の使法よりベルリッの新式に至るまで、その進歩なり成績なりは、大に觀るべきものがありますゆゑ、理論的言語學の發達を比較的に晚いゆゑと、如何にも残念にわ相違ありませんが、文化史上で學藝の沿革を觀察してみると、此の單に斯學に限つた譯でない、内科學の生理學に先ち、外科學の解剖學に先ち、藥學の化學に先ち、物産學の博物

學に先ち、政治學の國家學に先ち、經濟學の社會學に先ちて、皆それ／＼理論的科學の實際的科學に晩れて居るのですから、全く止むを得ません。で、言語學のもとに文獻學の科でありまして、この目的を達する手段に止まり、決して獨立のものと看做されずに居たのが、判然と専門の科學としてその軀貌を具へる様に進歩致したのわ、前世紀の初頭であります。姑この由來に溯つて、何故に古代より注意を惹いて居たのに係らず、かくその發達が晚かつたかと考へてみると、是れ全く宗教の影響でした。當時世人わ、耶蘇教の經典の舊約全書の原語たる「ヘブライ」語が凡百の國語の本源で、爾餘のものわすべて此より派生したもの、とゆゑ腹藏斷案に陥りました結果です。従うて、或わ「希」「拉」兩語を比較して、その異全を考へたり、又わ、个別の國語に就きその沿革を探したりした學者わありましたが、普通言語學の完成を企てる迄にわ進みませんでした。すると十八世紀の末葉になりまして、佛人ヅユペルロンの「波」語研究、英人ジョンスの「梵」語觀察が相次で起りまして、この結果わ、獨逸に這入つてから返響わ殊に著しく、前者わ哲學の方面でショーペンハワーの厭世思想となり、後者は文學の範圍でシレーゲル兄弟の中世主義になりました。就中「梵」語の影響わ、ゲートの「外語に通ぜざるものわ國語をも解せざるものなり」との格言に、實驗の機會を與へまして、フムボルトの哲學文典、ボツプの比較的^{ベルン}文典、グリシュの歴史的^{ベルン}文典の三大著述わ、鼎立しながら輔車の關係で、茲に印歐言語學の基礎を大磐石にする、次でボツトわ音韻論を創立し、ベンファイわ語根論を開拓した處で、鹽市大學のシライヘルわ生物學を應用して斯學の面目を一新し、其から現に、^{ストラスブルグ}街堡大學のブルクマンわ比較文法學の大作を完成しまして、目下わ正に第三期でふいますが、此間にも、クルチウスの「希語に於ける、コルセンの「拉語に於ける、デーツの「

ローマン」語に於ける、ミクロシチの「スラヴ」語に於ける、ツオイスの「ケルト」語に於ける、マイエルの「アルバニス」語に於ける、ヒューブシマンの「アルメニア」語に於ける等々、それ／＼斯學の大成に與つて力あるものですが、更に眼界を轉じて一覽致しますと、「セミト」語にわ佛國のサーシ、獨國のゲゼニウス、「ツーラン」語にわ匈國ヴムベリ、芬國のカストレン、「支那」語にわ佛國のレミューザ英國のレッグ、亞弗利加の諸語にわ獨國のブレーク、亞米利加の諸語にわ米國のガラチン等、皆その方面に於て錚錚たるものでございますが、此等すべて研究の結果を利用し總合し大成せる功績を、獨國のカベレンツシタインタール、ミステリヴント等に譲らなければならぬです。

○十九世紀わ我我御互に呱呱の聲を擧げた時代でムいまして、一寸歴史的に觀察しても、なかく興味の津津たる世紀でした。其で、少し話頭が岐路に外れる虞がありますけれども、現在を識るわ過去に鑑みなければなりませんから考へますと、近世各紀の代表の任に當りましたのわ、地理上よりゆゑと、十六世紀の西國、十七世紀の英國、十八世紀の佛國、十九世紀の獨國で、別に學問上より視ると、十六世紀の宗教學、十七世紀の道德學、十八世紀の政治學、十九世紀の經濟學です。更に、理學の範圍で十九世紀を御尋になれば、物理家わ電氣の世界と答へ、化學者わ攀素の時代と申します。加之、汽船や鐵路を申す迄もなく、裝甲艦や爆裂彈、又スエズ運河やアルプス隧道、尙レントゲン光線やマルコニ電信等、實に理學上の應用物質的の進歩が驚天動地の功績を奏しましたと全様に、心的科學の範圍でも彼の、英は海を支配し、佛は陸を管轄し、獨は空を統御す」とゆゑわれてテルスンの艦隊ナポレオンの兵力に對し戰敗の獨逸を鼎呂より重からしめたヘーゲルの哲學や

「始や兵馬を以てし次わ宗教を以てし終に法律を以てして羅馬は三度まで世界を統一した」、とゆーエイラングの金言を遠く日本の新民法に迄証明したキントシャイトの法學や、其他コントの社會學や、ランケの歴史學や、リストの經濟學や、エンゲルの統計學や、一一數にきれない程ですが、殊に言語學の方面でも、此と對等の發達がふいました。即グロテフエントラッセン等の楔字に於ける、シャンポリヨンシャバー等の画文に於ける發見わ、百餘年前まで吾人の了解しなかつた古文字、むしろ新國語を會得し始めました。従うて此が影響として、地理歴史考古人類の諸學科に莫大の裨益を與へ、否一步を進めて人文開達につき貢獻した新思想大光明といつたら、理學界に於ける勢力説や進化論に劣りません位。況して此より更に深くて大きい印度文化の闡明に於てをやです。してみれば印歐言語學より化成せる普通言語學が十九世紀文化史上の位置を御推察下さるゝことが出來ましょ。

○私共わ、餘暇に少許しか學藝史を繙いたことのないものですが、其ですら、心的科學(精神學)と物的科學(萬有學)との間に著しい差別を感ずることが多いのです。其内殊に、姑らく内容を問はず形式に就て考へてやても、學界當時の進歩を簡短に言表す命題と申して差支のない各科の原則定理に就て、萬有學の方面でわ皆人名を以て呼んで居るのが多く、譬へば、フェルマーの整數論に於ける、カルダノの方程式に於ける、ピユタゴラスの幾何學に於ける、デカルトの三角法に於ける、ガリレイの運動學に於ける、アルヒメデスの水靜學に於ける、ケプレルの星學に於ける、ホイグенсаの光學に於ける、オーム¹の電學に於ける、メンデリエフの化學に於ける等、かく人名を以て學科の法則を呼ぶことわ、第一内容わ兎も角形式を簡短に表出することが出來て記憶に便利ですし、第二學藝史

の立脚より視ても直にその時代を連想することが出来ますし、第三學者の功績を不朽に發揚する捷徑と申しても宜しい筈です。この理由がいますから、理學の中に博物科で動物種の種族より解剖の筋骨に至るまで、此類の學名殊に多く如何にも盛大なことです。之に反して、心的科學の範圍でわ、小生の見聞の淺寡に基きよくしよが、經濟學に於けるグレンシャム、財政學に於けるスミス位なもので、心理學に於けるフエヒテルわ却て生理學に於けるエーベルと申す方が至當の様で如何にも慊らん心地が致します、處が、僅に言語學に於て兩定理を承知致しました。一わグリンムで、一わエルテルで入います。

○グリンム氏定理の「獨」語で Lautverschiebungsgesetz (轉音法と申しまして、此に先ち丁抹のクリスチアンラスクがこの大部分を發見したのでから、恰物理學に於ける勢力不滅の原理をマイエルヘルムホルツの法則と禮え、氣球容積の定理をマリオート・ボイルの法則(尤この定理の効力に就てわ化學に於けるダルトンの法則と全様は、モーペルツエ以来大に價值を減却しましたに相違ありませんが、茲にわ内容の如何を吟味致すのが主意でなく、單に名稱の一例として挙げたのですから、此邊のことわ宜しう御海容を祈ります。)とゆゑ様に、ラスクグリンムの定理と申すのが至當でしよが、ダブリンでしたかシドニーでしたか確と記憶致し兼ねましたが、何でも文科大學の試験問題を始とし、英米等でわ Grims Law で知られて居りますから、姑之に従うのです。尤大思想大原則と申すものわ、何の學科でも、一人一代で偶然に落想發見せらるゝものわ、洵に少いことで、譬へば、實驗說でわコント以前にジェルマーンあり、認識論にわロツク以前にカサンヂあり、歴史學にわヘンデル以前にキッある、倫理學にわニチエ以前にシミある、經濟學にわスミス以前にラッ

子あり、人口論にわマルサス以前にコンドルセあり、生物學にわダーキン以前にラマヅクあり、函數論にわフクス以前にリーマンあり、微分にわニュートンライブニツ相軋り、海王星の發見にわアダムスガルエリエに對して争ひましたけれども、この推歩にわろの以前ガウスベッセル等が已に豫想した通、どゆー具合ですから、敢て此に限りて訝る程でもあるまいかと心得ます、さて轉音法わ之を詳察致しますと、なか／＼面倒ですから大略に致して、茲にわ多くブラツツの記載に從ひ要點を略説し、エルテルの法則わ少しく委細にしたいと思ひますから、此わ主としてデルブリュクの著作に依り叙述致しますよ。

⑤試に「印歐」語族の「梵」「希」「拉」「獨」「額土、古獨、中獨、近獨」の四（七）語に就て、有響塞音を相互に對照致しますと、第一清音の續音に變遷し、第二續音の濁音に轉化し、第三濁音の清音に復販することを發見致しますが、この順序の連環して紊れず、ど／＼しても偶然でない、即ち語を換へてゆーと、此等の音韻の變化わ一種の法則に從うて居ることが分かります。是を轉音法と命名致したのです。尙下例を御覽になればます／＼明白でしよ。

第一表

第二表

第三表

前表説明

(梵)pitr	(梵)ghorto	(梵)agras	(梵)ニサンクリト語
(希)pater	(希)hortos	(希)agras	(希)ニギリシヤ語
(拉)pater	(拉)hortus	(拉)ager	(拉)ニラクン語
(額)padar	(額)ganda	(額)akras	(額)ニコート語

(古) fater	(古) garto	(古) aechar	(古) 代フン
(中) vator	(中) garte	(中) acker	(中) 中世フン
(近) vater	(近) garten	(近) acker	(近) 近世フン
(英) (father)	(英) (garden)	(英) (acre)	(英) 一アギン

○處で、轉音法につき、すべての場合を詳細に點檢してみると、例外が大部に顯れて參ります。そこで、此等の例外を研究して、一種の法則を發見したのが、ラスクと全國のカールエルネルです。然し此に先ち、忙中の閑を偷んでグラスマンの意見を略叙する必要があると思ひます。乃グラスマンの主張に従うと、「梵」「希」「拉」「獨」等の諸語に於て、之を本來の位置からみると分離し難い關係でありながら、相互の父音が對應しない單語が多く存存するのは何故か、とゆ一困難の問題を解釋するには、太古に方り、此等諸語の根綴が有響の續音を頭綴に具て居たる、この假説より外にないと申したことです。

そこで、エルネルの「ゲルマン」語脈に於て、孤立的でなく連帶的に散見する一定の抵觸につき、周到の觀察を加えました。一例を舉げると、「獨」語の vater, nutter, bruder等は、るれく pitar(梵) Peter (希) nutar (梵) meter (希) brutar (梵) frater (拉)等に對應して居りますが、茲に一寸注意すると、音の場合には、或はとなり又はこととなりて兩者が存在して居ます。尙此と全様に奇異なる兩音現象を、語幹若くは語根に屬する兩個の形式に屢顯れることで、例之「額」語で、十個を意味する單語を tuihan 又 tigus とゆ一様な次第です。又更に進んで考へると、動詞の形式に於ても、古代に方り、一は正格に續音を伴ひ、一は變格に有響濁音を帯び居ます。譬へば、「古獨」語の slahan,

shoh, shugumi, shagan, ziohan, zoh, zigung, zogan等の如きものです。そこで「エルネルわ、此等の障礙を一點より排除することの出来る方法を發見致しました。是をなるべく簡短に申しますと、『印歐』の古代より傳説せられました「ゲルマン」脈の強調わ、父音の點彩に基くとゆ——考據です。更にこの梗概を述べると、古代の「ゲルマン」語脈で、續音の存在を見るのわ、此に圍まれた熟音（語綴）が強調を伴う時に限り、其他の場合にわ、有響の濁音であるどゆ——ことです。譬ふば、『梵』語「anatar」わ幹綴に強調がありましたから「額」語「brotar」ですけれども、『梵』語「pita」は強調を語尾に具はて居るので「額」語には「adar」に變じてるのです。

○引證は此位に止めて、この定理の發見が言語學に及ぼした大影響を觀察してみましょ。但茲には一一詳細にする餘裕がありませんから概畧に止めます。ろ——すると大約三部に分けた方が明白とゆわれましょ。

第一 言語學上にて苟も一個の法則と申す以上でわ、よし、所謂偶然を全く拒絶することが出来兼ねるにしても、單語の中綴の轉音に於て變格的のものが正格的のものと始全量と——ゆ——様なことわ、如何にしても許し誰いことで、若こ——ゆ——場合には、この變格に對する法則を發見致さなければならん責任が存在することとなりました。

第二 この定理の發見がありましたから何でも、音韵上調停を試みる場合にわ、ろの標準を廣大なる範圍に取りまして觀察しなければならんと立到りました。譬ふば、一個の「額」語につき研究するに致しましても、此と系圖的關係ある諸語を縦横に對比しなければならんのです。

第三 エルテルの所説の如く、この研究の版着にて殊に奇とすべきは、榛荻の太古で既に久しく衰亡して強調の原理が、今日なを「獨」語の動詞の形式で *ziehen, gezogen, sieden, gesatt-en, schneiden, geschnitten* と申す様に、その痕跡を分明に認めるところが出来るので、是でみると、語勢を穿鑿する樞鍵を從來の母音に就て求めて居たことと著しい誤謬でありまして、今後之を父音に探らんければならんこととなりました。

○さて印歐言語學の丁度今や第三期に達して居りますが、泰西諸國に於てこの研究の盛大なことがいつたら、大學の講座からいつても、學會の組織からいつても、著譯の出板からいつても、研究の題目からいつても、之をキルンやエステルゴールドの面面が辭書の翻刻に苦心し、次で、ベントリンクロート合著の大冊完成して學者がほつと一息吐いた當時と比較してみると、その知識の深淺といふ、その流行の範圍といふ、連も一朝一夕に述べ盡されぬ盛大の現況ですから、従うて神話學なり（獨のクーン）土俗學なり（獨のミユルレル）社會學なり（佛のルツルノ）法律學なり（英のメイン）の各學科が此から及ぼされた又現に受けてる影響を殆ど吾人の想像にも餘る程で、尙例を擧げるなら、シミトの人種説に於ける、シラーデルの原史説に於ける、ラッアルスの心理説に於ける等それ／＼一頭を抽いたものでありまして、歐米の壇姑に雄視して居る傍、言語學の根本問題として知られて居ます曲變の起原に就きまして、エストファールの發育説や、ルトキヒの適合説やいろ／＼ありますが、最も學者の満足を十分に博し難いので、此點からみますと、一任せし一派の反對があるに致しても、現今な有力の學説が矢張ボツの附着説であります。この附着と申す名稱の原語は *agglutination* でありまして、語學者の所謂「ツォラン」語族一名「ウラル、アルタイ」

語族別名莽韃語族に於て特徴と致しますので、言語變化の一種なる曲變、すなわち原語で申す Hectum に異りました作用に命名致したものです。毋從來わ、言語學上の三大種類であります所の孤獨語附着語曲變語の區別を嚴重に致して、相互の關係わ全く皆無と考へて居たのが、已に孤獨語の標本なる「支那語」に於てすら、本來わ單綴でなく、加之發音まで書契の前後を區別して、其の異全を弁じまする現代の學說からみますと、此等相互の關係は、最早川向の火事として顧みない譯には參らず、ペー・トリンクが已に「ヤクト」語に於て之を試みました様に、學者の注意は漸次に附着語に向いて參りました。してみると今後の景況を正しく推測することは出來兼ねるに致しても、よし大約ポップやガベレンツが嘗て對比したり推演致しましたと全様に、空想が變じて事實となることは必ないと斷言致し難い様でございます。其は兎も角、少くとも附着語研究の結果が此點に向かつて十分の參考になる丈の價值は、殆疑を挾む餘地があるまいと存じます。そこで附着語の主要なものは何でしよ。申す迄もなく其は歐洲に於てならば「^{フィン}芬語」「^{トルク}土語」「^{マジャル}匈」で、亞洲に於てならば「蒙古」「滿洲」の諸語でございますか。わーど、其からも——、白鳥博士が熱心に研究せられました「韓語」と殊に至大の關係がある者がありましたッけ。——それ日本語。

（實は、本題の主旨は前以て申し述べた通、エルネル氏定理の紹介が眼目でありましたのでしたが、此と必然の關係あるグリッシュ氏定理をも略叙することとなりました次第です。さて、印歐音韻論の問題の如きは、極東の我國に全く何等の痛痒をも感じない閑戸先生の空想迂遠學者の閑話に過ぎないだろ——との嫌疑に亘るかも知れませんが、斯る場合には、何卒基暗いと相場の極りました足下の灯台に一顧を賜はりましたならば、直に御了解になる——かと存じますゆはゆる「言靈の幸ふ國」の現

況は如何でありましたか。ダンテ以前の『伊』語、チヨ―サー以前の英語、ルーテル以前の獨語とは、ろんじよところの専門家の評判ではありますまいか。縱然此等の天才は容易に望み難いとしても、標準語や綴字法は如何なる状態でした。俗話近いて文話となり、意字變じて音字となる機運は正に熟しては居りませんか。いや、箇様な大問題には、小生の如き白面生の這出た場合ではございせんから、根本問題は姑らく含み、枝葉に亘り外語練習の手段に就まして、リオンに申す通り「國語に精通せざる者は外語にも熟達し難い者」であるのに、悲しいことには、國語が目下は五里霧中に彷徨して居る次第ですから、現今我國にて外語研究がその盛大の割合に結果のみるべき者が多くない譯は此に基くことと少くないと悟つてみると、よし一般周到の研究は容易に出づ難いにしても、自力の及ぶ限りで之を會得してゐる必要があると思ひます。即斯學の大勢には常に注意を費さなければならん譯ですから、小生が零碎の知識をも願ひず、茲で落想の儘に這般の消息を紹介する所以は、未熟の部分に就まして先達より教を仰ぎ益を請たいとゆゑに外ならぬ心得でございます。一寸考へて、カペレンツの評價に従ひ、我我日本人が、思想上でも亦世界列強の仲間入をした引出物として、此方より、他動的でなく自動的に觀察の新材料を供給して泰西の學界に貢獻する時期に近いと參りましたと見たは僻目でしよか、と箇様に滿腔の全情を表してみると、畢竟は我國主義で大屋根性を免れない譯。何時でも、迷い易いは當局の常ですから、何分にも八目持たるる諸君の御判斷を煩はさなければならせん。

〔完〕

